

研 究 報 告

陸軍力 1900～2000年

ブライアン・ボンド

軍事史家として、地上戦という広大なテーマにつき、歴史的観点から私の考えを述べてみたい。数多くの「肖像写真」や「スナップ写真」を通じ、私は1900年以降の主要な発達を立証し、21世紀の始まりにあたり、現代の問題点を論じる場を提供したいと考える。

1900年頃の地上戦は、まだ、ナポレオン時代の様相を多く残していた。戦略の目的は、戦闘で敵の地上軍を打ち破り、敵の領土、特に、その首都を占領することにあった。プロシアは、1870年から翌年にかけてのフランスとの戦いで、この目的をもの見事に達成し、イギリスは、1899年から翌年にかけて、ボア共和国と同様の目的を掲げて戦った。ヨーロッパにおける近代の戦争は、その後の紛争が短期決戦型になるという期待を大いに抱かせた。

この期待をいささかなりとも成就するため、ヨーロッパの軍隊は、予備役により編成される部隊に支援されて軍旗の下で戦務に就く兵士の数に主眼を置いた。ヨーロッパ大陸諸国の軍隊は、殆どが徴兵制に依存しており、また最大限、数百万規模の動員が可能と見積っていた。兵士は、よく、「銃剣」という非人間的な存在にたとえられた。

19世紀も終わりには、火力の重要性や精度に変化が見られた。信頼度の高い機関銃、無反動銃、速射野戦砲、長距離攻城砲などが広く用いられたが、産業革命は、その影響を好戦的社会に追いやるうえで十分及ぼしたわけでは決してない。これは、1914年においても、イギリスが「全て通常どおり」という政策を正式に採用したことで指摘できる。

1900年までには、鉄道の普及が、明らかに、戦争準備計画、特に、初期の戦略展開に画期的な影響を及ぼしていた。しかし、国境地域で鉄道が途切れると、とてつもない困難が気味悪く待ち受けていた。大きくはあるが機動力を欠く軍隊が頼れるものと言えば、馬による輸送や、兵士の行軍以外に殆どなかった。動力車両輸送は黎明期であったし、航空機はまだなかった。ポーランドの実業家で、アマチュア軍事評論家のイワン・ブロッホ (Ivan Bloch) が、今後、大きな戦争は膠着戦、塹壕戦、あるいは消耗戦になると予測して軍の参謀達の不評を買った。決定的なナポレオン戦争型の勝利は得られず、戦いは長引き、遂には、内戦や革命の中での崩壊が訪れるであろうとブロッホは予測したのであった。

広い意味において、プロッホが正しかったことは、1914年から1918年にかけての戦争で証明された。全ての交戦国は、軍隊の規模拡大　そしてこれの維持　を何とか成し遂げ、一方、民間（本稿では「銃後」と呼ぶ）は、膨大な軍事予算にただひたすら耐えた。海軍力は重要であったが、成否を分ける存在ではなく、陸軍力は期待どおりの成果を上げられないという悲劇を演じていた。当時、技術革新や優れた質の武器・人材を強調し出す理論家がいた一方で、陸軍力が、果たして、国家政策の有効な手段として見直されることになるのかを疑問視する者もいた。

1916年から翌々年まで頃には、産業革命の影響が陸軍にもその社会基盤にも見られたが、その実際の効果は万遍でなく、まちまちであった。例えば、無線や電話は、まだ、戦況を大きく左右するものではなかった。攻撃力と守備力の不均衡が最も顕著であった。大規模軍隊は、戦場において、戦闘力を維持できたし、食料、弾薬、そしてはるかに発達した医療サービスを補給された。しかし、火力や野戦築城術が戦略機動に勝っていたため、守備側に極めて有利であった。西部戦線では、英仏海峡からスイスにかけ、防衛地帯が奥深く延び、開放翼がなかった。ごくまれな例外はあったが、不意急襲縦深突破や、逆襲に備えた地域の確保ができる状況にはなかった。1914年当時、トラックや装甲車は殆どなく、戦争が終わる時、漸く充足された。戦車は、1916年9月に戦争で始めて使用されたが、1918年当時でも、速度は遅く、信頼性は低く、脆弱なままであった。確かに、それらは、まだ、地上戦で、迅速な機動を回復し、勝利をもたらし得る決戦兵器ではなかった。1918年頃には、また、戦術空軍力が、陸軍力を近接支援する重要な役割を果たしていたが、未だ、その貢献が不可欠というわけではなかった。西部戦線における「百日攻勢」の勝利の頃でさえ、連合軍が進む速度は、平均で、1日1マイルに満たなかった。

1918年頃の陸軍力がどんな状況であったかをかいつまんで言えば、その活動がいかに鈍重で、高コストであったとはいえ、ドイツとその同盟諸国を敗退させるうえで、陸軍力が最終的に重要な役割を果たした事実を見逃すわけにはいかない。地上での勝利（少なくとも敗北の回避）が極めて重要なことは、戦勝国、敗戦国の双方に認識されていた。

第二次世界大戦当時までは、訓練を受けた軍事兵力の動員可能量が、依然（特に、ソ連にとって）重要であったものの、その後は、武器・装備、訓練、指導力、ドクトリン、そして情報といった面において、その質がより重要と認識されるようになった。さらに、第一次世界大戦で、大半が尉官として従軍した当時の軍事指導者の世代は、地上戦において、より妥当な損害で機動力を取り戻し、決定的成果を挙げようと躍起になった。既に、ナチス色を強めていたドイツ国防軍は、1939年から翌々年にかけて、ドイツ空軍の貴重な支援を得ていたとはいえ、地上戦での優れた攻撃力により、ヨーロッパ中西部の大半を占領し、そのすばらしい軍事力を立証した。近接航空支援は電撃作戦の重要な衝

撃力としての要素であったが、陸軍戦力が支配的役割を果たしていた。

イタリアとドイツは、遂に緩慢で犠牲の多い地上戦により制圧され、占領されたが、これは、連合軍の圧倒的な物的優越が、最終的に、ドイツの優れた作戦能力、特に戦術能力に勝ったからである。ドイツ国防軍は、東部戦線の地上消耗戦で徐々に疲弊した。同様に、日本の地上戦における華々しい勝利も、最後には、数、装備、および特に重要な兵站で一歩リードする連合軍の反攻を受けた。幸いなことに、連合地上軍の日本本土侵攻・占領能力が試されることはなかった。

1939年から1945年にかけて、陸軍力に影響を及ぼした改良全てについて、本稿でその一切を詳しく述べる必要はない。砲兵隊、戦車等主要兵器システムに印象深い進展が見られたと言うだけでこと足りるが、同様に重要なこととして、兵站状況が第一次世界大戦当時とは違っていたことがある。1940～43年の北アフリカ会戦で、砂漠での1千マイル以上に及ぶ軍隊活動を維持した両軍の驚くべき成果を見てもそれが分かる。1944年とその翌年、イギリス軍がビルマのジャングルや山中を進軍したのも印象に残る。同じ年、連合軍（主として米国）がノルマンディーからバルト海への進攻を維持できたのも、終戦近くまでノルマンディー港からの補給がなされたこともさることながら、兵站実績に顕著なものが見られたからである。

第二次世界大戦は、過去のいかなる戦争よりも、精神と物質の両面で、「総合」の極みに近づいたという指摘に間違いはない。空軍力と海軍力が革命的な発展を遂げ、戦争に対する銃後の反発がどんどん強まっていたものの、殆どの戦域における主要な特色は、依然、地上戦。それも、通常型とされる地上戦。にあった。要するに、会戦は、なお、征服者に利益をもたらす重要な鉱物資源や食料、生産能力、および人口を擁する領土の占領を目的として行われていた。ナチス・ドイツは、特に、西ヨーロッパに関し、冷酷な拡張政策により、その占領を引き合うものとするに近い状況に到達していた。戦争が終わる数年前、その生産は強制労働に大きく依存していた。この政策にも関わらず海軍や（特に原爆使用を除き）空軍は戦争を終結に導くことができなかった。ヒットラーは、ナポレオン同様、1941年のモスクワ占領により、それに続く勝利を期待していたが、ここでも、もう少しというところでうまく行かなかった。連合軍がヨーロッパの戦争を終わらせるには、なおも、ローマ、ウィーン、プラハ、ブダペスト、それに最後にベルリンの占領が必要なことは明らかであった。1945年5月、連合軍とソ連軍はエルベ川河畔で会議を開き、1918年のときと異なり、ドイツの敗北を確認した。したがって、20世紀半ば当時、地上戦は、依然、決定的要件ではあったものの、その頃は、海軍の支援も、しばしば、また、空軍支援は、殆ど常に、このうえもなく重要であったという立派な但し書きが付く。

20世紀後半に起きた膨大な数の低強度紛争やより大規模かつ伝統的な戦争は、その一

般的特質の簡潔で正確な記述が極めて困難である。陸軍力の通常戦力部分は、その大半が依然として有用であったものの、問われるべき疑問の幅も広がった。例えば、『血にまみれた哀れな歩兵部隊』の役割はかつてのごとく極めて重大であったとはいえ、既に、第二次世界大戦において、兵士は高度に訓練され、専門技能を身につけていなければならないことが実証されていた。前線の歩兵隊では、数のうえで相対的な低下を続ける『歯』の部分を『尾』で支援する管理戦務に就く者がますます増えた。例えば、1944年頃、約1万7千名を擁した英国の歩兵1個師団で、銃や銃剣を握る者は4,000名程度に過ぎなかった。第二次世界大戦では、男子もさることながら、それ以上に、女子を有効に活用すべきことがなされるべきというその教訓が再確認された。未熟な『歩兵』や『雑兵』への依存は、単に軍事効果を低下させるのみならず犯罪的浪費につながると広く認識されるようになった。地上戦における他の重要な特質として、その有意性が増したのは、最新の武器や装備の信頼性ある生産力である。まず、これは二流の敵でも、装備は比較的充足されているという事実からの見地である。2つ目として、遠方戦域への陸軍戦力の「展開」能力が、それまでよりずっと困難かつ高価になっている。例えば、1982年当時、英国はアルゼンチンの徴兵による軍人に勝る職業軍人を保有していたが、8千マイル離れたフォークランド諸島に軍人を輸送し、敵空軍領域内の敵地で維持することで、形勢は五分五分となった。3つ目に、通信、情報・対情報を含む、重要な分野をコントロール下におく必要性がますます顕在化したことである。

20世紀の後半には、無数の低強度紛争や「小規模な戦争」により、しばしば、戦死傷、虐殺、荒廃といった忌まわしい結果がもたらされた。カンボジア、スーダン、コンゴ、あるいはルワンダの内戦は、そのごく一例に過ぎない。1980年代のイラン、イラク間等、主権国家同士の大規模で長期にわたった戦争は例外で、事実、この種の戦争は、1914-18年の戦争と多くの点で類似していた。(1967年のイスラエル、1982年の英国等) 地上戦での卓越した軍事技術や作戦能力により、依然、明確な、ときには華々しくさえある勝利が得られる可能性はあるものの、この勝利を政治的目的達成や安全保障の強化に繋げるのはより困難になっている。イスラエルによる一連の鮮やかな勝利は、その最も顕著な例であるが、同じことは、湾岸戦争、カシミールを巡るインドとパキスタンの対立、はてはアルゼンチンとの戦争における英国の勝利にも言える。これらの例やスリランカでのごとき、さらに多くの長期にわたる紛争は、21世紀早々における地上戦の目的や長期有効性に深刻な疑問を投げかけていると言える。では、主な問題点はなにか。

『先進国』のほとんどは、現在、志願兵で構成される比較的小規模な職業戦力に依存している。女子は、その採用数が増えており、重要なポストを占めつつある。政府は、死傷者が多く出るのを(数千はもちろん、数百でさえ)嫌い、理想的には、味方の戦力に全く被害のない戦争を追求する。米国のベトナム派兵が最盛期を迎えた1969年当時、

ベトナム在留の米国兵員数は50万人にも上った。併せて5万5千人ほどの米兵が戦死した。このようなことから、米国は、コソボ紛争や現在のアフガニスタン戦争で、遠隔から影響を及ぼし得る空軍力を大きな拠りどころとした。欧米のメディアは、このような身から出た錆を強調し過ぎる懸念があるものの、これは、今なお確かな事実である。欧米のテレビは、自己の軍隊の過ちをとやかく言い過ぎるきらいはあるが、目標設定精度は、つい最近と比べても、著しくよくなっている。

もう1つの問題点は、『第三世界』の軍隊や民兵組織でさえ、その援助国にもよるが、かなり精巧な武器を所有し得るといえることがある。このような兵器システムの維持や更新は困難であろうとも、それが存在するというだけで、敵の戦力や持久力に関する判断が極めて複雑になるが、これは、1991年の湾岸戦争で明らかにされ、現在、中東やアフガニスタンでの戦況にも寄与している真実である。

今日、地球規模のテレビ放送がもたらす影響は、明らかにこのうえなく重大であり、私以上に詳しい専門家が特に研究するだけの価値がある。米国がベトナム戦争に負けたのか否かは、主として、その国内テレビ放送が及ぼす影響の悪い面を反映しており、未だに論議がなされているものの、当時、「開放社会」が独裁敵国と戦うのは極めて不利であるということは、既に、はっきりしていた。1991年、サダム・フセインの地上軍はクウェートで決定的な敗北を期したが、米国は、逃げるイラク軍を皆殺しにするなどともできなかったということもあって、このときの有利な状況は本国に報道されなかった。結果として、フセインは、軍事的な敗北を宣伝の勝利にすり替えることができ、アラブ世界には、正しいとして広く受け入れられた。イスラエルは、レバノンへの介入により、その1948年の建国以来唱えてきた「道徳的大義」の一部を放棄し、これは、今も、多くの欧米メディアに、パレスチナとの永久的な平和関係樹立を損なう主な障害として、しばしば、採り上げられている。タリバンへの軍事行動を伝える欧米のテレビ放送でも、当初から、同様の疑問が投げかけられた。これは開放社会の貴重な自由という問題であり、それ自体が非難されることはあまりない。ただ、地上戦における戦闘の様子が、そのテレビ描写の仕方、批判的に、ねじ曲げられて、あるいは曖昧に伝えられる懸念が以前より増しているというのは困ったことである。

恐らく、このことは、より大きな問題の一つの側面に過ぎないと言える。すなわち、負けている側に負けていると認めさせるのが実際に難しくなっており、他の利害関係国を伴う場合はなおさらであるということである。このような傾向の裏側にある原因については、拙著『勝利の追求』で述べている。こうした状況は、国に戦争を『政治の道具』にさせないようにするかぎりにおいて有益ではあるものの、現在行われている戦争を交戦国間の妥協により止めさせるのが難しくなる点で思わしくない。

本稿の概要研究では、陸軍力が、その物理的な戦力内容や行為のみならず、政治的な

脈絡や意味においても、根本的に変化している旨の示唆を試みた。例えば、軍事作戦に関し 非常に局地的な戦争を除き 陸軍力を空軍力と切り離して論じるのは、最早、非現実的である。更に視野を広げれば冷戦時代に構築された広大な軍事力は、ベトナム、アフガニスタン、チェチェン等物質的には弱小であっても、明確な主義主張を持つ敵への有効性を明らかに失っている。一流の軍事大国は、今や、本国基地からの即応を意図に、新しい時代のより小規模で、高度の訓練を受け、機動性の高い部隊へと、その戦力適合化を図っている。

一部、こうした専門技術戦力の現実的有効性は、あまり訓練されておらず、装備も貧弱ながら、その正当で譲れない大義と見なすところのためには死をも厭わない（進んで死ぬことさえある）狂信的とも言える敵に対し、いつでも、職業軍人の命を掛ける覚悟が工業先進性と民主性のより高い国にあるか否かにかかっている。

1976年、既に、ジョン・キーガン（John Keegan）卿は、その著書『戦闘の様相』において、既に、戦闘が、その増大する恐ろしさの余り、考慮する必要がないものとなりつつあると結論づけている。北米、西ヨーロッパ等一部の地域については当たっているものの、世界の多くの地域では、残念ながら、このような予測が、未だ、現実のものとなっていない。

歴史家は、人間の弱さと職業的な偏見の両方から、過去ばかり見て予測を避けがちになる。しかし、未来を見つめようとする意欲のより強い戦略アナリストでも、記録には無関心であるという事実には救われる思いがする。陸軍力は、上述のごとく複雑な状況がからんではいるものの、あらゆる武力衝突の究極の試金石でありつづけるというのが私の結論である。戦力使用については、裕福な国と貧乏な国の格差が広がり、前者は、ますます、技術や情報の卓越性に依存し、小規模で質の高い職業戦力を導入するようになるであろう。その主たる目的は、現状維持と友好国や顧客国の保護となろう。これに敵対する国は、地の利、管理ずさんなメディア、計算された国際テロ行為、それに大義のためには死をも厭わない覚悟に訴えて出る。これは、特に、冷戦の終結に伴い、戦争の少ないより協力的な世界の出現を信じる楽楽家には気の滅入る結論である。悲しいかな、自由を重んじる民主主義国家のその国民や価値を護ろうとする意図が厳しく試される、新しくより恐ろしい戦争が台頭しつつある。